第142号 発行所 金光寺

宮崎県西臼杵郡

0 9 8 2

五ヶ瀬町大字鞍岡 5 9 2 7 番地

83-2338

かなか風情のあるものでしたから、シャワーを浴びてたから、シャワーを浴びてたから、行水は、食後、どもがら、行水は、食後、どもがら、行水は、食後、どもがら、行水は、食後、がを洗うことをいったのでしたがら、活水で身体を洗っために、清水で身体を洗っために、清水で身体を洗のために、清水で身体を洗っために、清水で身体を洗っために、清水で身体を洗がっために、清水で身体を洗がないがない風情のあるものでしたがない風情のあるものでしたがら、

なが洗さし鉢あき酌と つーいいたやり)(い 手ま訖しう た般身ン

○順著

から)

じてしゃでは つの僧簡以浴 たが、温はいい が、温りの が、温りの が、温りの と 従よをはと

典

たを着て、縁がったを着て、縁がまことをいった。 ものですか。 ものできるが、 なやのど水を ををご

後、ゆ なか

金光寺よろずコーナー

靍井光義さんからいただいた枝垂れ桃が きれいに咲いていたので撮影しました。 残念ながら県道に面し、座るところがな

一気に満開を迎えた境内の花々。 いので「花見て一杯」ができません。

3月、金光寺ご門徒の次の方がご往生な さいました。さとりの智慧をいただかれ尊いお導きをと念じることです。 2013年3月 4日寂 満86歳

子 樣 2 0 1 3 年 3 月 6 日寂 満 8 1 歳 渡 瀬 渡 邊 忠 男 様 2 0 1 3 年 3 月 2 7 日寂 満 8 9 歳 揚 興 梠 トミ子 様

ホームページ開いてます。 URL /konkhoji.jp/ 4月8日現在 入室者数 22,753人

満開の桜と本堂

(5日・境内)

今月のことば 念仏もうすところに 立ち上がっていく力が あたえられる (西元宗助

「『なんまんだぶ、なんまんだぶ』とお念仏申 す。そして、ものすごく気持ちが楽になったんで すところに、亡くなっただんなさんはいつも一緒 す」と、その女性は、笑顔で語ってくださいまし にいてくださいますよ」。この一言で救われた方にた。 がいらっしゃいます。本願寺の聞法会館で行われ る「門徒推進員中央教習」で、何年か前に出会っ えに出遇えたことのよろこびと、今後もみ教えを た六十代の女性です。班ごとの話し合いのなかで 依りどころとして生きていきたい旨がしたためて 自己紹介をしながら、自身のお念仏との出遇いを、ありました。なんまんだぶが大きな力になるとい 次のように教えてくださいました。

「私は、数年前に夫を亡くしました。幸くて切 方でした。 なくて、どうしようもなくて、ずっと泣いていま 私たちの阿弥陀さまは、「いま、ここ、この私 した。夫のいない生活など考えられませんでした。に」はたらきかけていてくださいます。「なんま そんな折り、住職さんがこう言ってくださったんんだぶ」となり、私に届いてくださっています。 です。『なんまんだぶ、なんまんだぶ』とお念仏 お念仏申す人生とは、阿弥陀さまと一緒に歩む一 申すところに、亡くなっただんなさんはいつも一 筋の道であるといただいています。 緒にいてくださいますよ、と。住職さんのその一 言が、なぜか胸にすーっとしみこんでいったんで

しばらくしてお便りをいただき、そこにはみ教 うことを、その姿でしっかりと示してくださった

(本願寺出版社刊「大乗」誌より転載)

と示されています

御名を聞き信じる人は、往生成仏すべき身に定まるのである。

たとえ世界中に火が満ちているとしても、ひるまず進み、仏のの御名をきくひとは、ながく不退にかなふなりみなり、また、一般ないとは、ながく不退にかなふなりかなが、

原

証

記念日」 れたことを記念する「立教開宗四月十五日は浄土真宗が開か です。

て教行信証・本典とも言う) 浄土真実教行証文類』(略し りょうと しんじっきょうきょうしょう ほんでん こょう と しんじっきょうきょうしょうもんるい それは親鸞聖人が主著『顕 ると 梯 春 明らかにされた日だからです。 を完成され、 が 号 ジ 先日、 實圓和上が親鸞聖人の これが、 (二〇一三年 「一味」 (二〇一三年 **味**# 浄土真宗の教義 を

月で、 介した ご著作 浄土真宗のみ教えがお分かり ということを縁として今月と来 なっておられました。立教開宗 教行証文類』についてお書きに ただけるかもしれません。 かもしれませんが、 いと思います。 梯和上のお示しを一部紹 いただけるとぼんやりと と題して『顕浄土真実 少し、 何度も 難

第142号

きているのであると知らせてい

智慧と慈悲の完成を目指して生 如来の「御いのち」に包まれて、 顕浄土真実教行証文類』 親鸞聖人のご著 厏

す。 け、その内容を「本願力回向」宗の真髄を「浄土真宗」と名づ 明らかにしていかれた教義書で の「二回向四法」という独自のけ、その内容を「本願力回向」 された「念仏往生」という浄土 恩師法然聖人が生涯をかけて顕常は真実教行証文類』は 「念仏成仏」の教義体系として 實圓

います。「還相」とは、「還っを目指して生きていく有様をい

「 還 相」

に浄化された悟りの境界 (浄土) 境界を乗り越えて、煩悩が完全

蔵菩薩という菩薩であったときとは、久遠の昔、阿弥陀仏が法す。「本願力回向」の「本願」 ΙĆ 相回向であり、 全な悟りの境地である浄土(真 念仏するものに育て上げて、 の(衆生)を、その本願を信じ 往相の教・ 「二回向」 生きとし生けるすべてのも へ導いていこうと願わ 行 • 四法」 信・証をい さいといま ま

空しい死に向かって生きていくことです。 このように、私

私は

る

のではなく、現に今、

「還ってきて」人々を救っていめに、煩悩に汚わたこの私間し

六巻

愛憎の煩悩が渦巻くこの迷いのま」ということです。 私どもが

とは往相回向と還 て苦しみ悩む人々を救済するた慧を完成し、大慈悲心を起こしす。浄土に生まれたものは、智てくるありさま」ということで

相と還相を恵み与えてくださる その本願力によって私どもに往 わたる修行によってその誓願れたことをいり、こととしませんが ことです。 相回向であり、「回向」とは、 たことを「本願力」 通りに衆生を救う力を完成され 「二回向」とは、

「E目」とは、「往くありさの教・行・信・証をいいますこと 「四法」とは、 さらに永劫 往相回向と還 といいます。 往相 **ത** に 救いを讃仰する書でした。それは力と希望に満ちた如来 けることを還相というのです。 即座に如 ただくことを往相の人生という 人を救い続ける身にしていただ のです。 この世で悩み苦しむ総て そして浄土に行けば、 来と同じ悟りの身に

Ó

の な

を呼び覚まして浄土に向かわせ を呼び覚まして浄土に向かわせ を呼び覚まして浄土に向かわせ を呼び覚まして浄土に向かわせ を呼び覚まして浄土に向かわせ いしたのが次の「行文類」です。 がしたのが次の「行文類」です。 がいを呼びかけられている如来 がいを呼びかけられている如来 がいを呼びかけられているが、それは の口に現れていますが、それは のが、私どもに直接その本願の の説法であり、その意味で「如 向する」とい 来行」であることを明らかに 煩悩に翻弄されている、私ども弥陀仏は、我欲の殻に包まれて、 その内容の一端を言えば、 しし ます。それを明 叼

仏事お休みのお知らせ

なの御名をきくひとは『浄土和讃』にも、 たとひ大千世界に みてたとひ大千世界に みてたさならない』と、蓮如

あってはならない」と、蓮如上人は仰せになりました。このんでもないことである。仏法においては、明日ということがを終え、ひまな時間をつくって仏法を聞こうと思うのは、と「仏法は世間の用事を差し置いて聞きなさい。世間の用事「ぶらぼう」せばん、ようじ

下記の日はお葬式以外の仏事は行いません。ご協力ください。

記

月 4 2 6 日 2 7 日 私用(高校用務) 私用(高校用務)

5 月 4日 12日 私用(親戚用務) 私用(親戚法事)

6 月 15日・16日終日 私用(高校用務) 30日 高千穂組 仏教女性のつどい

8 月 2 4 日~ 2 5 日 私用(大学用務・京都市)

第三十四回高千穂組仏教女性の集

日 六月三十日 (日) 午前九時三〇分

期

所 高千穂町自然休養村管理センタ

師 净土真宗本願寺派西都市 光善寺住職

福 永布 教充使

証

師

をもすぎゆ

の仰。とな

隙ま をあ

なふ

な

持参品

念 珠

・三一)にあそばされ候ふ。

百五十五)

門徒式章 • 経本 筆記用具

方を通して行います。参加者の募集は金光寺仏教婦 人会地区役員 0

光

現代語訳》